

# 水環境整備事業を利用した学校ビオトープ公園の事例報告

## The Case Report of a School Biotope Park Using The Water Environmental Maintenance Enterprise

高森弘明

Hiroaki Takamori

（計画地域）本計画地域は、三重県の北東端に位置する木曽岬町である。古くは水郷地帯で知られ、自然豊かな素掘り用排水路は、営農に苦労した反面、身近な自然とのふれ合いの場として、豊かな自然環境が形成されていた。

また、この地域は海拔ゼロメートル地帯であるため、土地基盤整備事業等によりポンプや排水路整備が急ピッチで進められ、地域全体で土地改良事業がほぼ完了している。そうした流れの中で過去の素掘り水路は全て姿を消し、排水路はコンクリート・矢板護岸にて整備され、直線水路に変わってしまった。それと共に、素掘り水路に生育・生息していた多様な自然生態系も壊れてしまった。

さらに、近年の地盤沈下の進行で、農業用水はパイプライン化し、市街化の進行で幹線排水路にはヘドロが堆積して水質が著しく悪化している。計画地域の自然は過去に比べ著しく変化してきている。

（学校ビオトープ計画立案の背景）上述した現状から、本町では第3次木曽岬町総合計画で自然環境の復元等を掲げており、平成9年度から水環境整備事業で、本町を縦貫する中央幹線排水路の水辺環境整備をスタートさせている。しかし、幹線排水路沿いの水辺空間整備のみでは、木曽岬町の掲げる過去の自然環境復元の満足度を高めることは難しく、幹線排水路の安全対策も考えると、直接水に触れ動植物に関わることでできる水路に近づけることはできない状態である。このため、過去の自然環境の復元方策をどうするかが当事業推進上の課題として投げかけられた。また、その方策は水環境整備事業制度の範囲内でできる自然環境保全対策とする必要がある。



写真 現在の中央幹線排水路

Pic. The present central trunk drainage canal

当事業は既に水質浄化と散策道の整備が進められつつあり、平成12年度においてこの方策を検討することとなった。

学校ビオトープ公園計画はこの方策検討過程において、地域住民及び学校関係者の協力と支援を得て実現したもので、木曽岬町の過去の水郷の自然を、ビオトープ公園の小区画に凝縮させ、子供たちにその自然の存在を知らせ、後々までこれを伝えることを狙いとしている。木曽岬小学校は中央幹線排水路沿いに面しており、小学校の運動場の用地が確保できれば、水環境整備事業の採択要件に沿った公園計画が可能となるのもで、学校関係者の理解と協力がなければ完成できなかったのもである。

また、ビオトープ公園計画を進めるに当たっては、木曽岬町、木曽岬小学校、県（北勢株式会社 若 鈴 Wakasuzu Corporation 学校ビオトープ

県民局桑名農政部）等の各担当者と何度も話し合い、検討委員会を通じて、計画立案から実施設計に至る作業を行った。事業の中での目的は、地域住民のコミュニティと子供たちへの情操教育をねらいとしたビオトープ公園の実現である。教材として児童が生態を観察し、小さな生物の命の貴さを理解してもらうこととしている。

（学校ビオトープの計画内容）地域に生息した自然生物をベースとして、幹線排水路と連係させて、次のような計画としている。

花の絨毯のひろば...シロツメグサ、タネホ、春の七草、秋の七草など、木曽岬町の野生植物の栽培。

小鳥の森...現在生息している身近な鳥などが集まるコロニーをめざす。

トンボ池...池の水深は深いところで30～50cm程度とし、深水域は水生生物の生息場、浅水域はヤゴやメダカの避難場所とする。池底は緩やかな勾配にする。

なかのしま...池の中央に、シギ・チドリ類の鳥類や両生は虫類・昆虫類等が休憩、または採卵等ができる島を作る。外部からの野生動物の侵入もなく安全が確保できる。

小川...過去に生息していたゲンジボタルの復活とメダカやドジョウが生息する小川の復元。

体験農業...水田農業の体験。

腐葉土・堆肥積み場...腐植をエサとする地中の生物たちとふれあう場

遊歩道...幹線排水路へのアクセス道とし、各小公園とのネットワークの連絡網とする。

また、これらの公園計画を実施していく上において、全て当事業で完成させるのではなく、子供たちの力で出来ると思われる部分はあえて踏み込まず、最終的には子供たちの手で完成させていく様な手法を提案した。この考え方をおくことによって、今後の維持管理や日常の管理を子供たちに委ねていくことができる。

（今後について）この計画は、過去の自然を復元することは無理なため、子供たちの自然教育を念頭に、モデル的に小さな範囲でその自然の復元を試みたものである。

現在、建設中ではあるが、木曽岬小学校ホームページでも紹介され、小学校関係者、児童、地域住民が心待ちにしている。

計画では出来る範囲で、事業実施後の具体的な管理方策などについて、地域住民、学校関係者等と議論をしながら事業計画を進めたが、事業年度の制約もあり、もっと時間を掛けて踏み込んだ論議ができれば幸いであった。

今後、このビオトープ公園の自然性を、子供たちと地域住民が一体となって高めていくことで、学校と地域の結びつきが深まれば幸いである。

学校ビオトープ等の形成については、どこまでの範囲を事業が、また、どこからを地域住民や子供たちが担うのか、などについてワークショップなどを利用して合意形成していく必要がある。

引用・参考文献）1）杉山恵一・赤尾整志：学校ビオトープの展開

2）（社）農村環境整備センター：農村環境整備の科学